

経済学と倫理学との境界

—『倫理学の経済学および経済学の倫理学』に寄せて—

折 原 裕

はしがき

第1節 労働倫理

第2節 価値と選好

第3節 世俗的倫理

第4節 相対主義

むすびにかえて

はしがき

以下で取り上げる書物は、ジェフリー・ブレナン、ジュゼッペ・エウセピ編集『倫理学の経済学および経済学の倫理学』¹⁾である。この書物は、2006年にイタリアのサピエンザ大学で開催された学会「客観的価値、無価値、主観的価値——市場と国家の倫理的基礎——」における報告に基づいた、論文集である。学会での口頭による報告に加えて、書き下ろしの論文もいくつか含まれている。

この書物は大略、新古典派経済学に親和的な立場から、経済学と倫理ないし倫理学との関連を論じたものと見てよい。11篇の論文から成る論文集であるが、全体が3部に分かれており、第1部が「価格と価値の小道」、第2部が「貨幣とメダル——集団的選択における動機付けの役割——」、第3部が「政治的市場プロセスと自由の倫理——税の公平と税のモラル——」

と、それぞれ題されている。あまり大部な書物ではないが、当然ながら、ひとつひとつの論文が独立したテーマと、独立した思考様式を有しており、小論ですべてを論ずることは困難なので、比較的抽象度の高いテーマを取り扱う、第1部だけを取り上げたい。

編者序文で、ブレナンとエウセピは（執筆分担不明）、次のように書き始めている。

「アダム・スミスが、おそらく『国富論』がその最も著名な部分である、知的な企てを最初に思いついたとき、彼はグラスゴー大学の道德哲学の教授だった。この意味で、独立した学問の専門分野としての経済学研究の出発点である『国富論』に着目すれば、経済学は『倫理学から』生まれたと、理由があって言うことができる。／そうかも知れないが、しかし、われわれ経済学者は、230年というへだたり〔この書物のきっかけになった学会は『国富論』出版の1776年からちょうど230年後に開催された〕を越えて、家族的な故郷からいくぶん遠ざかってしまった。今日、学問的水準での経済学と倫理学との行き来は、取るに足りなくはないが、かなり乏しい。そうした行き来は、たとえ尊敬される専門家たちになされたものであっても、境界の両側で心底から、風変わりな仕事とみなされている。」²⁾

このように、経済学が、その言わば出生地である倫理学からかけへだってしまう理由は何であるか。経済学の側に、倫理学からへだってしまう、何らかの内的な理由があるのか。編者は、そうは考えていないようである。編者によれば、経済学と倫理学との疎隔は、主として、職業的な理由によって生ずる。

編者は、たとえば、アメリカの大学に職を求める若い経済学者の場合を、想定する。最初の面接で、専門分野を聞かれれば、公共経済学とか応用ミクロ経済学とか答えるのが普通である。ここで率直さが向こう見ずに出てしまい、道德哲学と経済学とが交差するあたりでの仕事がしたい、などと

漏らしてしまえば、就職の次のステップには進めない可能性が高い、と編者は言う。「そういう哲学的興味があったとしても、心の中に完全に隠していた方がいいのだ。」³⁾

それでは、そういう大学の経済学教員市場の現状は、経済学の排他主義的欠陥を示すものなのか。編者は、そうは考えない。なぜなら、哲学教員市場にもほぼ同様のハードルはあって、経済学への興味など示さず、もっとコアな領域、言語哲学とか認識論とかにこだわった方が、就職へのチャンスが大きいからだ。

要するに、大学の専門分野は、相互に著しい分業を遂げている。それは、『国富論』第1章でアダム・スミスが分業について述べたとき、学問の場合の分業にも触れているが、そのアダム・スミスの発言の現実化でもある。「市場の規模の役割についてのアダム・スミス自身の議論は、知的な事柄における分業がますます精密になること（スミスが書いて2世紀何がしかの間に起こった）を予見するものだった。だから、専門分野としての経済学からの倫理学のだんだんの分離は、すなわち、経済学からの道徳哲学の分離は、知的労働のますますの分業のまさに必然的な姿である、とみなしたくなる。」⁴⁾

そればかりではない、と編者は言う。専門分野は、研究の質を監視し、証明書を発行する、制度的な人工物である。この人工物が、大学の学部構造の中で、再生産される。この人工物が、誰が職を得て、誰がテニユアを授与されるかを、決定する。さらには、職業上の地位が算定される、雑誌まで運営するのだ。

編者は、こうした専門分野の、言うならば自己完結性についても、現状肯定的である。編者は、むしろ、こうした専門分野の求心性こそ、専門分野の発展を促進する力であると受け止めているからである。だからこそ、編者はこう言うことになる。

「学際的な仕事は、それゆえ、一定の制度的な危険にさらされる。すな

わち、監視や質の制御を担う、明確な制度的機構の欠如である。そうした欠如が、質の精査を最も恐れる学者を付随的に引き付けてしまう、という危険もある。簡単に言えば、学際的な仕事であるほど、『二流の』類いと予言可能である。そうした評判があれば、学際的な仕事は、最高の頭脳を引き付けにくいだろう。」⁵⁾

結局のところ、編者にとって、編者自身が関心を寄せている、経済学と倫理学との疎隔は、学問の分業の結果であり、また、学問に必要なプロセスでもある、ということになる。それでは、一体なぜ、編者が経済学と倫理学との疎隔に関心を寄せ、経済学と倫理学との境界に注目するのか。編者の答えは、とりあえずのものとしてであろうが、いささか実もふたもない。「経済学におけるノーベル賞受賞者のうちのいかに多くが、重大な学際的傾向を有していたかは、特筆に値する」⁶⁾と言うのである。そして、アロー、ブキャナン、センといった名を挙げた上で、こう述べる。

「学問間の境界に沿う（交わる）学際領域が、ほとんどの学者に回避される傾向を持つという理由から確かなのであるが、そこにはおそらく、興味深い『落ち穂』がある。少なくとも、われわれはそう信じたい。」⁷⁾

以上から、明らかなように、経済学と倫理学との疎隔それ自体を問題としようというのではなく、その疎隔自体は肯定した上で、あえてそうした疎隔に目を向けることによる新たな成果（たぶん経済学の側の）を期待する、というのが編者の基本姿勢であることになる。

第1節 労働倫理

第1部の4つの論文のうち、冒頭に置かれたのは、ノーベル経済学賞受賞者のジェームズ・M・ブキャナンによる「倫理と市場の範囲」⁸⁾である。

ブキャナンは、『国富論』でアダム・スミスが、社会的分業による生産力の向上について述べた箇所に、独特の解釈を加えて、これまた独特の議

論を展開する。

「アダム・スミスの洞察を最小限の要点にまで縮めて、記述的な現実感から遠くへだたるけれども、論理的構造の要素は保持したモデルにまで、簡素化するのが有益である。この簡素化には、交換それ自身の論理に立ち戻ることが必要となる。人間はなぜ他者と交換するのか？／選好や才能の相違に訴求するのが、並みの解答だろう。リカード的な比較優位は、たずねれば、ほとんどすべての経済学者に採用されるだろう。この一見無害な一歩は本質的に、スミスのもっと一般的でもっと基礎的な議論を、不明瞭にしてしまう。すべての参加者が、選好においても才能（能力）においても同一であるという状態をモデルにするのが、有用である。そのように高度に様式化されたモデルに向き合えば、多くの経済学者にとって、交換はレズン・デートルを失なうだろう。／しかし、このモデルは、基本的スミスの原理が、独立のものとして現われるのを許すのである。交換は、専門化がそれだけで生産的であるために発生する。人々は、相互交換に引き継がれる、専門化された生産が、自給自足よりも高く価値評価される成果を生み出すことを、認識するだろう。／この様式化においては、専門化が外生的であるリカード的な状態に対置して、専門化が選択される。純粹スミスのモデルでは、相違が内生的になる。参加者は、専門化を選択するがゆえに相違するようになるのだ。人々は、潜在的な交換の利益を獲得するために、そうするのである。／ここには、含意された行動内容において（リカード的なモデルに現われているものを越えて）倫理的な要素が存在する。交換の連鎖に入ることを選択する人々は、彼らの支配下の資源の専門化を通じて、交換が達せられる相手に対して、潜在的な利益をもたらすのである。」⁹⁾

ブキャナンによれば、市場参加者は、自らの利益のために交換の連鎖に入るのであって、その行動が他者にも利益をもたらすという点は、意識されない。その点は、経済学にとっても同様であり、かくて「市場行動の基

本的倫理的含意は無視されてしまう」¹⁰⁾のである。

ブキャナンの論文での議論は、この後、ブキャナンの言うスミスのモデルと新古典派理論との整合性に移行していくが、この点にはここでは立ち入らない。

つまるところ、ブキャナンの論文での議論は、彼の書物『倫理の経済学』¹¹⁾での議論の繰り返しである。また、論文での議論がやや中途半端に終わっているのに対して、『倫理の経済学』での議論の方が、ブキャナン自身の考え方を良く伝えていると思われるので、こちらの方に目を転じて、彼の考えをより詳しく追ってみよう。

ブキャナンの一連の議論は、「『一生懸命に働くこと』または『より多く仕事をする』ことは、われわれ自身の選好の『良いこと』を基準にして、われわれすべてにとって良いことでありうるし、また良いことである」¹²⁾という論点（彼の言う「労働倫理」）を、論証するためになされている。

ブキャナンにとって、スミスのモデルに表明される社会的分業の進展は、市場の範囲の拡大であり、そうした市場の範囲の拡大である限りにおいて、市場参加者がより多くの労働を市場に提供することは、社会全体の利益を増大させることになる。

「専門化の利益が使い尽くされないと承認するなら、スミスの基本命題を、先に設定した問題に直接に応用できるだろう。われわれがより多く働き、週当たりより多くの労働時間を市場へと供給し、それと引き換えに家に持ち帰るより大きな給料袋の中身を、より多くの財・サービスに支出するとき、一体何が起ころうというのか？ その答えは明らかである。われわれは、市場の『大きさ』、交換のネットワークを拡大するのである。[…]／[……] 週当たりより多くの労働時間の市場への供給はより大きな市場を意味し、より大きな市場は経済全体の生産力を一般的に高めながら、専門化の度合いをさらに進展させることができることを意味している。それゆえ、私の判断によれば、この経済においても他の人がより多く働く

ならば、私の生活は向上するのである。そのことは、私がどれだけ多くの労働を供給することを選択するかにかかわらず、他の人々の市場に対する供給時間がより少ない場合に比べて、最終的には、私自身の投入によって、より大きな量の産出物の購入が可能になるという、単純な理由からである。」¹³⁾

ブキャナンの一連の議論で、最も問われるべき問題は、より多くの労働の市場への供給が社会的な生産力の向上をもたらすという関係を、ブキャナンが考えるように、直ちに倫理にかなうことであると言ってよいのか、という問題であろう。問題の焦点は、より多くの労働を供給する人々が、その行為の結果としての生産力の向上を目指してではなく、自らの利益を目指している、という点にあるのではない（この点も、ひとつ問題ではあるが、ここでは触れない）。一生懸命に働くことや、より多く働くことが、労働に際しての規範として機能しており、その規範が生産力の向上をもたらす関係を、倫理的関係にとらえてよいのか、という問題なのである。

ブキャナンの議論は、倫理にかなうとは全体の利益を増加させること、という功利主義の倫理観を前提にしている。新古典派経済学は功利主義と近い立場にあるので、功利主義を前提にするということは、新古典派経済学自身を前提に考えているに等しい。それでは、前提が狭過ぎるのではないか。

また、一生懸命働くとし生産力が向上するという関係それ自体の内部には、一生懸命働くことの規範としての成立が、何を根拠にしているのか、定かでない。そうであるとすれば、その規範の成立は社会の外部に、少なくとも交換社会の外部に、与件として前提される他ない。

しかし、実はこれらの点は、ブキャナン自身によって、十分に意識されているようなのである。『倫理の経済学』では、一連の議論に先立って、ブキャナンはこう述べている。

「ここでの核心的分野は経済学であって、倫理学ではない。その中心と

なる主張は、簡単なものである。すなわち、人間の行動に対する倫理的または道徳的強制は、プラスまたはマイナスの経済的価値で測定すれば重要な経済的効果を及ぼす、というのがそれである。この主張から、そうした強制が経済的効果を及ぼすのだから、倫理的諸規範もしくは諸原則は、ある経済的連鎖に参加するすべての人々の幸福を決定付ける要因である、という系論が導かれる。いかなる人の幸福の水準も、部分的には、他の人々がどのように倫理的または道徳的に振舞うかということによって影響を受ける。したがって、究極的には個々人の選好によって測られた幸福を基準として『より良い』という言葉をもしわれわれが使うのならば、いくつかの倫理的教えまたは原則は他のものよりも『より良い』ということができる。」¹⁴⁾

つまり、ブキャナンの一連の議論は、倫理ないし倫理学に直接触れようとするものではない。市場の外部で、あるいは経済学の外部で成立している倫理規範が、どのように市場に影響しうるか、検討するものととどまるのである。

しかし、だからと言って、上に指摘した問題が雲散霧消するわけではない。それは、倫理の側から経済学を照射しているようでいて、実は、経済学の側から、経済学の問題処理の仕方に合わせて、倫理に遡及しているに過ぎないからである。

ブキャナンは、自分の問題意識を、言わば倫理の経済効果に限定するのであるが、それも、すべての倫理に関与しうるものではないとして、次のように補足する。

「もちろん私は、倫理諸原則の潜在的な経済的含意が、実際にプラスであるか、ゼロであるか、もしくはマイナスであるかについて分析するために、すべての種類の倫理原則を評価するような仕事にこれからとりかろうというのではない。私の目的はずっと限定されたものである。特に私は、『ピューリタン倫理』という標題のもとに要約しうるいくつかのなじみ深

い倫理原則についてだけに分析と議論を限定したい。」¹⁵⁾

この「ピューリタン倫理」のいくつかの中に、ここで瞥見している「労働倫理」が含まれる関連になる。だから、ブキャナンは、倫理の経済効果の中でも、彼が「ピューリタン倫理」とみなすものだけに、議論を限定しているわけである。しかも、「ピューリタン倫理」という言葉から連想される、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の主張は、自分の議論の範囲外だとして、次のようにも言う。

「私は、マックス・ウェーバーが資本主義の精神をプロテスタントの倫理、特にカルヴィニストの倫理と関係付けた有名な本の内容が正しいのか、あるいは誤っているのかという問題には、まったく関心はないのである。その代わりに、『ピューリタン倫理』という言葉によって連想されるもっともなじみ深い諸規範を取り上げて、それらを単に経済分析にしたがわせたいと思っただけなのである。」¹⁶⁾

以上のように、ブキャナンの一連の議論は、二重、三重の制約を課した舞台上で展開されている。一つ、マックス・ウェーバーの著作の場合のように、事実を争うものではない。二つ、倫理を直接には問題にせず、経済学の側からその効果を測定できそうな規範のみを取り上げる。三つ、功利主義の前提など、経済学の思想基盤等の是非は問わない。

ブキャナンの一連の議論が、極めて周到で慎重な配慮の下に用意されたものであることは、特筆に値すると言ってよい。しかし、それはそれとして、件の問題は、依然として残るように思われる。ブキャナンの議論は、倫理や倫理学について何かを付け加えるものではない。それは、ブキャナン自身の制約にもよる。では、ひるがえって、ブキャナンの議論は、経済学に何かを付け加えるものであろうか。確かに、「労働倫理」を推進しようというのであれば、ブキャナンの一連の議論の先に、新古典派理論の一定の変化を期待することもできるかも知れない。だが、その「労働倫理」には、どういう根拠が用意されているのか。その根拠を、事実にも求めず、

経済学にも求めないのであるから、そこには深刻な欠落があるのではないだろうか。

ブキャナンの一連の議論は、経済学に外部から、一種恣意的な解釈を加えているだけのようにも見受けられる。それは、映写機が経済学のスクリーンに映し出すものではなく、経済学のスクリーンに映らない中空を、言わば想像的に見ているだけの可能性がある。

第2節 価値と選好

論文集第1部の第2論文は、編者であるブレナンとエウセビによる（執筆分担不明）「価値と諸価値、選好と価格——倫理学的諸問題への経済学的展望——」¹⁷⁾である。

編者たちは、この論文を次のように書き始めている。

「アメリカとイギリスとは、共通の言語によって隔てられている国である、と言われる。この評言が意味するのはたぶん、アメリカで何かを意味する言葉が、イギリスではかなり違う何かを意味するということであろう。[……]／道徳哲学者と経済学者の対話は、長年の休眠期を経て、近年いくらか復活してきた。この対話におけるコミュニケーション不全の状態は、アメリカとイギリスのたとえ以上のものに見える。こうした状態は、経済学者が、哲学者とは異なり、用語の用法を越えた広範な概念分析を好まない、という事実によって悪化している。われわれ経済学者は、等式のために、厳密さを守ろうとする傾向があるのだ。この章では、コミュニケーション促進のために、いくつかの言葉のいささかの明確化を試みたい。」¹⁸⁾ 編者は、先に見た序文での認識を引き継ぎ、経済学と倫理学との疎隔を、言葉の面から埋めようというわけである。

編者によれば、経済学において、「諸価値」(values)、「好み」(tastes)、「選好」(preferences) は、同じ意味であり、また、「価値」(value)、「価

格」(price) も、同じ意味である。前の組の「諸価値」と、後の組の「価値」とは、経済学内部では混同されない。しかし、経済学の「諸価値」と、倫理学の「諸価値」となると、話は簡単ではないことになる。

編者の言では、経済学は「選択の理論」と言われるが、倫理学もまた選択（「オルタナティブな行為の価値評価」）に関わっている。経済学と倫理学とで、選択は違うのか、違うとしたら、どう違うのか。こう問いながらも、選者の議論は、言葉の問題に集中してゆく。

まず、経済学内部での、「諸価値」と「価値」との用法の違いが、リカードにまでさかのぼって検討されるのであるが、ここで立ち入るほどの内容はない。要するに、編者が確認するのは、リカードの「諸価値」は主観的価値であり、また「価値」は客観的価値（交換価値）である、という点だからである。

編者は、ロビンソン・クルーソーの孤島を訪れたり、エッジワース・ボックスを引用したりもするのであるが、それらにも、ここで触れるほどの内容はない。

編者による、「諸価値」と「価値」との用法の違いについての検討は、次の言葉で締めくくられることになる。

「専門用語の混同はともかく、経済学者が、一般的な使用法では多義的であったため、『諸価値』と『価値』とを様々な異なった概念に使ってきた、という事実を見失ってはならない。経済学者のささやかだが重要な役割は、そうした事実を指し示すことである。交換過程は、様々な『諸価値』（選好）を、財それぞれの共通の市場『価値』（慣習的ニユメレールによる財の価格）に変換する、一種奇妙な錬金術を行なう。われわれが論じたいのは、この変換が私財市場のはなはだしく際立った特徴だ、ということなのである。われわれが、『正義』や『自由』や（『集合的幸福』でさえ）といった総合的抽象によって『諸価値』が表現されるような、哲学者の住む世界に入るならば、そうした変換の可能性は、高度に制限される。」¹⁹⁾

つまるところ、編者の言葉の問題についての検討は、以下に見る、「諸価値」と「選好」と、この場合倫理的な価値と経済学的な選好と、両者の比較に限定されてゆく。

「合理性の前提に立てば、行為は選好によって説明されるべきである。諸価値が行動への影響に何らかの役割を及ぼすというのであれば（合理性の枠組の中で諸価値が概念的に可能だとすれば）諸価値は選好というカテゴリーとどうにか折り合うだろう。そうであるなら、諸価値に駆られた行為と、その他の類いの選好に駆られた行為と、どうやって区別するのか？もし、われわれが諸価値をその他の選好から行動的に区別できないとすれば、そうした区別の要点は何か？ あなたがお金を払うとき、単に嗜好の故か、そうすべきだという価値判断の故か、どうやって区別するのか？ これらはすべて、効用の極大化に帰着する。経済学者ならそう言うだろう。」²⁰⁾

上の発言は、「要するに、諸価値とは、それが存在するとしたら、人間の心の中にのみ存在するものだ」²¹⁾という言葉を受けてのものなのであるが、一種の行動主義の表明とみなしてよい。（実際、上の発言の少し後では、経済学者はみな行動主義者であるように言われる）。行動主義は、心の存在を認めない、ないしは心の存在に依拠しない、特異な心理学であるが、編者によって経済学がそうであるなら、心の中にしかないと編者が考える「諸価値」は、すでに検討する必要のないものになるはずである。

しかし、編者の「諸価値」への検討は、まだ多角的に続く。第一に、「諸価値」は、道徳的満足感や罪悪感と関係しているとされる（スミスの「心の中の観察者」が引き合いに出される）。第二に、「諸価値」は、他者の行為の参照を必要とし、交通ルールのような慣習であるとされる。第三に、「諸価値」は、信念のようなもので、真実とされ、考察に影響されず、説得されないとされる。

これらの検討は、それ自体としては面白いものである。学会で自説が受け入れられそうにないとき、20ドルやるから自説を支持してくれと言って

も誰も支持しないだろうという例など、学会で報告しているのであれば、場内は爆笑するだろう。ジョン・ブルーム²²⁾から聞いた例として紹介される話——楽観的であるほど速く治る病気があり、 n 日でよくなると信ずれば $n+1$ 日で治るとすると、明日治ると信ずれば明後日治ることになるはずだが、明後日治る期待は明日治ると信ずることの否定なのでうまくいかない——というのも、学会での聴衆サービスであれば面白い。

ただ、それらはいわゆる脱線であって、議論は少しも進まないのである。(この後、メタ選好——従属選好への選好、たとえば、アルコール中毒者がアルコール中毒をやめることを選好する——への検討などが続くが、ここでは触れない)。

あれこれ検討したあげく、終わりに近いところでは、次のように述べられる。

「この章は、意味論的な明確化の企てであった。様々な意味を持つ用語(『諸価値』、『価値』、『選好』、『価格』)を取り上げ、それらの意味を、まず市場に特有の交換状態で吟味し、次いで道徳哲学の文脈で吟味した。／経済学と同様、倫理学はオルタナティブの選択を含んでいる。経済学の場合、選択は通常、行為の選択として考察される。倫理学では、選択は、ときに行為、ときに信念、ときに態度である。経済学でそうした選択を処理する装置は、『選好』の装置である。道徳哲学でそうした選択を処理する装置は、『諸価値』である。型通りであれば、経済学者にとって、『諸価値』とはすなわち選好である。[……]／われわれの議論のほとんどは、経済学者に使用される用語『選好』と、道徳哲学者に使用される用語『価値』と、両者の関係に関心を寄せてきた。道徳哲学者は、これらの議論で、経済学者からいくらかを学ぶことができよう。倫理的な望ましきの要素(たとえば自由)の『価値』は、一般的に、どれだけの自由がすでに享受されており、どれだけその他すべての望ましきの要素が享受されているか、に依存している。しかし、市場において、市場参加者横断的に財の共通限界

価値評価をもたらす交換の力は、倫理的な諸価値の場合には、一般には適用できない。」²³⁾

結局のところ、この論文は、倫理学の価値について考察しているようでありながら、その内実は、経済学の選好を倫理学の価値に対置しているに過ぎない。その際、経済学の選好という概念自体や、あるいはその運用につき、根本的な疑問は提起されることがなかった。そうである以上、こうした一連の議論が、倫理学にはもちろん、経済学にも何も付け加えないことは、言うまでもない。

第3節 世俗的倫理

ステファノ・ゴリーニによる第3論文²⁴⁾は、次のような文章から始まっている。

「世界を理解するに当たって合理主義者の姿勢を採用すること、つまり批判的合理主義は、哲学者や科学者や知識人にとってばかりではなく、あらゆる階層の人々にとっても、不可欠である。それは、宗教やイデオロギーの要求に対抗する、衝突コースに自らを位置するという、理論的、道徳的、社会的な含意を有している。この章は、緊密に結び付く4つのテーゼに囲まれるように構成されている。第1のテーゼ。道徳性と経済学との違いは、諸価値と利害との違いと、同一である。第2のテーゼ。批判的合理主義の理論的基礎（世俗的世界観）およびその道徳的基礎（理性にのみ信念を置く個人的自由独立の世俗的倫理）は、一元論的な概念の構成要素として不可分であり、宗教やイデオロギーの非世俗的な世界観や道徳とは両立しない。第3のテーゼ。独特な社会的役割を伴う世俗的倫理は、社会的な結束と自由な社会秩序のための義務のうちにある、特別な倫理的性質に具体化される。この義務の特別な性質は、世俗的倫理を、個人的な幸福と成功の世俗的な不道徳につきものの、支配的経済的刺激としての利子搾

取に対する、また、非世俗的な道德原理が倫理的基礎に侵入することを許してしまう、形式的に自由な社会秩序につきものの、非自由な実質としての社会的な教条主義に対する、抵抗可能な唯一の力にする。第4のテーゼ。道德と社会正義は異なる。道德は、諸価値（個人的自由独立ないしは自己尊敬の個人的感情の世俗的価値）を保持する領域にあって、利害（幸福）の満足の個人的相互的な分配とは無関係である。ぴったりその代わりに社会正義があるのであって、それは個人相互的な分配の平等・不平等に関わり、道德性には関係がない。」²⁵⁾

ずいぶん盛りだくさんのことが述べられるように見えるが、この論文には期待するほどの内容はない。以下、上の4つのテーゼが敷衍されるけれども、それらテーゼの根拠が検討されることはない。また、それぞれのテーゼが敷衍されても、分かりにくさが増すばかりであり、論じられることの具体的なイメージが一向に明瞭にならないのである。

第1のテーゼで、経済学と道德との相違を、利害と諸価値との相違だとするのは、第2論文と実質的に距離がない。第2のテーゼで、論者が言う世俗的世界観とは、要するに、科学的世界観ということである。科学を宗教やイデオロギーに対置するのも、それ自体は平凡である。第3、第4のテーゼが、ユニークなのかも知れないが、意味するところが理解しづらい。世俗的世界観に支えられた社会にも世俗的倫理があって、それが宗教やイデオロギーの侵入を防ぐことによって、自由を守り、教条主義（ファシズムなどが想定されているらしい）に抵抗する、ということのようであるが、論理構造が明らかでない。そうあって欲しいという希望であるのなら、理解できなくもないが、そのことと「利子搾取」（この言葉の意味もよく説明されない）との関係もよく分からない。道德と正義とを区分けするロジックも、正義を分配の正義にのみ限定するという以上の意味があるのか、判然としない。

全体として、自分の世界観を展開して見せただけ、という観がある。壮

大なスケールの物語のあらすじだけ見せられている、というおもむきでもある。それでいて、こんなことも言うのである。

「世俗的な世界観の下で、地球上のあらゆる生命形態は、生命自身の自然の連携を相互に分かち持ち、それらのうちのどの生命も外部から特権を与えられない。この意味で、人間生活の世俗的絶対的意味は、生命世界の総体に繰り広げられる。世俗的世界観は、世俗的道德次元とともに、彼や彼女の隣人に対する個人の独特な道德的責任を、彼や彼女が一部をなす生命世界一般に拡張することを通じて、自然的生命連携を保証する。人類を生命世界の総体に結び付ける世俗的連携と、生命世界に対する人類の責任の世俗的道德は、多くの現代科学者によって研究されてきた。中でも、エドワード・O・ウィルソンが有名である。彼らは、世俗的倫理の主要部分に、最高の地位を占めている。」²⁶⁾

エドワード・ウィルソンを支持するのは論者の勝手であろうけれども、ここでは論旨の逸脱がはなはだしく、論理の飛躍もはなはだしい。

この論者は、なかなかの思想家なのかも知れないが、この論文に関しては、評価困難としか言いようがない。

第4節 相対主義

第4論文²⁷⁾は、経済学における規範的な価値の問題を検討している。その点では、第2論文と共通するが、相対主義の観点が強く働くところが独特である。第4論文冒頭には、次の言葉が置かれている。

「新古典派経済学者は、合理的規範的な議論が手段・目的関係の指摘に限定される、と信ずる向きが強い。」²⁸⁾ その場合、相対主義を進めて、客観的価値は存在しないという主張に傾く経済学者もいる。その主張をさらに押し進めれば、存在しないものは認識できないという、反認知主義に陥ってしまう。しかし、著者によれば、それは行き過ぎである。客観的価値

の存在自体を認めつつ、相対主義の立場を保持しようというのが、著者の目指すところのようだ。

著者は、いったん経済学から離れて、問題を考える。黄色いバナナと黄色い自動車が「黄色さ」という性質を示すとしても、良いバナナと良い自動車が「良さ」を合わせ持つと言ってよいか、と著者は問う。そして、黄色いは黄色さに立脚するが、良いが自然的性質に立脚するのではないとすれば、良いは非自然的な何かに立脚するのか、と問いを進める。

こうした問いに答えようとして、著者は、「ザンダー錯視」を例に上げる。ザンダー錯視とは、二つの平行四辺形の、実際には等しい長さの対角線が、大きな平行四辺形の対角線が長く、小さな平行四辺形の対角線が短く、見えてしまうというもので、心理学の教科書などにしばしば紹介されている。この錯視は、専門家の間では、知覚の不十分を示すものではなく、奥行きの違いを加味した、知覚の応用力の高さを示すものと理解されているらしい。ところが著者は、こうした錯視を、文化の違いに由来する価値判断の相違の例として用いてしまうので（こうした錯視が起こるのは、長方形に囲まれて暮らしているからだというのであるが、真偽は定かではない）あまり適切な例とは言えない。ともあれ、著者はこう言う。

「われわれは、物を見るよう訓練されるけれども、それは一定の慣習的な仕方にしたがってである。いったん慣習的な『観察構造』ができあがると、判断の相互主観的な制御が可能になる。われわれが育ったフレームワークの中で、われわれは個人相互的に制御可能な仕方、判断を下すのである。判断は、強い慣習のないしは訓練の要素であり、文化的に形成される。判断は、野生の事実ではなく、一定の『世界を作る仕方』の中でのみ現われる事実、基礎を置いている。／観察の判断において考えられることは、もっと先に適用されうる。たとえば、同じ仕方、育てられた人々の間では、倫理的な判断が、色についての陳述と同様、個人相互的にしか信頼できないかも知れない。適切な倫理的判断を下すために、自然的能力

を不十分にしか教育されない、ないしはまったく教育されない人々も、ありうるだろう。そのことはどれだけ重要なのか？ 明らかに色盲の個人がいても、その色についての観察を、まったく問題なしとか、相互主観的に収斂的とか、誰も疑わないかも知れない。同様に、一定の倫理的特性を理解できない部外者がいても、たいして意味がなかったりする。」²⁹⁾

ここで著者が述べようとしていることが、価値判断は相互主観的に成立するものだから、価値判断の多様性もまた、果てしなく分散するものではなく、あるまとまりを形成し、したがって、価値判断の多様性に直面しても、それら多様性を完全に相対主義的に対等と扱う困難は生じない、というのであれば、著者の当初の議論とも噛み合うであろう。つまり、価値判断の相互主観性は、価値判断のある程度の客観性へと結び付く可能性がある。しかし、著者のこの後の議論は、そういう可能性には進まないで、相対主義の弁護に終始してしまうのである。それは、相互主観性についての議論が、価値判断や目的の妥当性と関連付けられないで、もっぱら手段の妥当性にのみ関連付けられるからである。

ライオネル・ロビンズのいわゆる希少性定義について触れた上で、著者はこう言う。「経済の科学にとって目的は外生的であり、経済の議論にとって手段は内生的な仕方決定される。経済学は、事実として一定の目的を追求する個人に対して、一定の制約の下で何をなすべきかについて、相互主観的に妥当な規範的種類の申し立て（目的への到達を目指した）を行なうことができる。提示される手段の妥当性は相互主観的に評価され、目的の吟味は不可能である。／誰かが一定の欲望を持つかどうかは、事実の問題であって、議論の問題ではない。それが主観的欲望であるのなら、「青」という事実について議論する余地はない。事実が存在するかどうかについては、相互主観的に妥当な仕方申し立てできるけれども、それが存在するべきかどうか、あるいはそこに横たわる信念が存在するべきかどうか、については、相互主観的に妥当な仕方はない。他の個人に対して、

別の欲望を発展させるよう、説得したり訓練したり試みることができても、究極の目的が何らかの意味で正当化されるかどうかという、実質的な問題を取り扱う科学的な道はない。」³⁰⁾

ライオネル・ロビンズに依拠してこのように言明してしまえば、相対主義の立場を保持しつつ、価値判断のある程度の客観性を認めようという、著者の目指すところは、もはや放棄されたに等しいであろう。著者は、「価値判断は完全に恣意的なものではない」とか、価値判断のすべてが嗜好のようではないとして、消費税か所得税かという問題は、チョコレートかバニラかという問題とは異なるという。だが、結局、チョコレート・ケーキの焼き方は教えられても、チョコレート・ケーキを焼くべきかどうかは教えられない、というのであるから、価値判断にしかるべき位置は与えられないままなのである。

むすびにかえて

以上、経済学と倫理学との境界に関わる論文4つを足早に見てきたのであるが、4つともに共通するのは、倫理的な価値を経済学の中でどう扱うか、という問題に関連する点である。

ブキャナンの論文は、倫理の経済効果という観点から、この問題に接近しようとするが、経済学の外部に倫理が前提される他ないために、その倫理は経済学の側に根拠を持たず、それゆえ、経済学と倫理とは遠く切り離されたままに終わる。

編者による第2論文では、多種多様な議論を経ながらも、要するに、倫理学での価値は、経済学での選好に相当するとされるにとどまる。ここでも、倫理学と経済学とは、平行線のように交わらない。

第3論文はやや難解であるが、著者言うところの「世俗的倫理」の成立根拠が、経済学の土俵の中で説かれないので、倫理と経済とはやはり接続

しない。

第4論文では、相互主観性という概念を用いて、客観的な価値と相対主義との両立が企図されるが、結局、相互主観性もっぱら手段に関わるとされるため、目的としての倫理的な価値は、経済学の外部に追いやられたままである。

4つの論文とも、倫理的な価値を経済学の中で扱い兼ね、そのことによって倫理学と経済学との距離は、一向に縮まらないのである。

だが、これは、言わば当たり前である。それは、アダム・スミスの『道徳感情論』と『国富論』と、ふたつが直接に接続しないことと同じなのである。

編者もブキャナンも、アダム・スミスを十二分に意識しており、おそらく、アダム・スミス問題³¹⁾の所在も理解しているであろう。

アダム・スミス問題は、博愛を奨励するのではないが、道徳を説く哲学者スミスと、博愛を否定するのではないが、利己的市場を説く経済学者スミスと、両者の間に矛盾を見る経済学者が多かったところに発生した。しかし、当然かもしれないが、アダム・スミスが哲学者スミスと経済学者スミスとの「矛盾」に苦しんだということはなかった。スミス自身は、経済学者として著名になった後も、最晩年まで、若い頃の著作『道徳感情論』の改訂にいそしんだのである。このことは、道徳と経済学との間の懸隔が、あまりにも遠いことを物語るものと受け止めるべきだろう。

適切な例である自信はないが、料理を得意とする詩人がいても、彼の書く詩と彼の作る料理との間に直接の関係はない。道徳を扱う倫理学と、市場を扱う経済学と、このふたつの領域の差は、極めて大きい。倫理学の長い歴史と、経済学の比較的短い歴史を比べてみても、その対象や方法の違いからくる差は、非常に大である。

それゆえまた、「経済学と倫理学との境界」と言っても、両者の距離が遠いために、同一平面上に境界線を確定できるような隣接関係に両者はな

い。したがって、経済学と倫理学との境界に「落ち穂」を拾おうしても、それは簡単ではないことになる。

とりわけ、ライオネル・ロビンズの希少性定義以降、倫理的価値判断を経済学から排除してきた新古典派経済学にとって、道徳や倫理を経済学の体系内で取り扱うことは、明示的に困難であり続けてきた。

実は、そのことは、新古典派経済学の方法論的基礎を打ち立てたライオネル・ロビンズその人が、十分に意識していたことなのである。

『経済学の本質と意義』でロビンズは、経済学が目的それ自体に頓着しないことを、決して不道徳を容認するものではないと力説して、次のように言う。

「経済学者が夢中になっているのは品行の中でも特に低級なものであるという、経済科学のある種の批判者たちの間に流行する信念は、誤解によるものである。経済学者は目的それ自体を取り扱うものではない。彼はどのような仕方でも目的の達成が限定されるかを取り扱う。目的は高尚な場合もあろうし、また、下劣な場合もあろう。」³²⁾

この発言のウェイトは、無論のこと、経済学が与件とする目的は、低級なものに限られないという点にある。むしろ、それら目的のほとんどは低級とは言えないものである、とロビンズは述べたいであろう。しかし、目的は与件であるという論理がそれを許さないのである。だから、上の発言の少し後でも、次のように述べる他ない。

「経済学者も、他の人々と同様に、売春婦のサービスを、究極的に倫理的な意味ではいかなる『善』にも寄与しないと考えるかも知れない。けれどもこのようなサービスが希少〔……〕であるということ、したがって雇われた愛にも〔……〕経済的側面があること、を否定するのは、事実と一致するようには思われない。」³³⁾

経済学者も、売春を悪だと言いたいのであるが、論理上言えないわけである。こうした、止むを得ざる一種の禁欲がロビンズの著作を貫いており、

そのことがかえって、ロビンズのイメージする経済学の世界を、決して低級ではないものと感じさせる点が興味深い。

そうした叙述の効果はともかく、ロビンズは経済学と倫理学との関係については、次のように言う。

「不幸にしてこのふたつの学問を、単なる並置以外にはどんな形においても、関連付けるということは、論理的に可能とは思われない。経済学は、確かめられる事実を取り扱う。倫理学は、価値判断と義務とを取り扱う。このふたつの研究分野は議論の同一平面上にない。実証的研究の一般法則と規範的研究の一般法則との間には、いかなる巧妙さも隠しおおせない、そして空間または時間におけるいかなる並置も架橋しない、論理的へのあたりがある。」³⁴⁾

ロビンズのこの言葉は、小論で垣間見たように、ロビンズの方法を継承してきた現代の新古典派経済学に関しても、ぴったりと当てはまる。経済学と倫理学とのへだたりは今も、ロビンズの言うように容易には架橋できない関係にある。

もっとも、倫理学との架橋の困難さという点では、新古典派以外の経済学にとっても、それが市場経済の理論を指すのであれば、例外でないことは言うまでもない。

注

- 1) Geoffery Brennan, Giuseppe Eusepi eds., *The Economics of Ethics and the Ethics of Economics* (Cheltenham, Edward Elgar, 2009).
- 2) *Ibid.*, p. x i.
- 3) *Ibid.*
- 4) *Ibid.*, p. x ii - x iii.
- 5) *Ibid.*, p. x vi.
- 6) *Ibid.*
- 7) *Ibid.*
- 8) James M. Buchanan, "Ethics and the extent of the market".

- 9) *Ibid.*, p.5.
- 10) *Ibid.*, p.6.
- 11) James M. Buchanan, *Ethics and Economic Progress* (Norman, University of Oklahoma Press, 1994). 小畑二郎訳『倫理の経済学』（有斐閣、1997年）。
- 12) *Ibid.*, p.2. 上掲、4頁。
- 13) *Ibid.*, p.15-16. 上掲、19-20頁。
- 14) *Ibid.*, p.1. 上掲、2頁。
- 15) *Ibid.*, p.2. 上掲、2-3頁。
- 16) *Ibid.* 上掲、3頁。
- 17) Geoffery Brennan, Giuseppe Eusepi, “Value and values, preferences and price; an economic perspective on ethical questions”.
- 18) *Ibid.*, p.14.
- 19) *Ibid.*, p.18-19.
- 20) *Ibid.*, p.22.
- 21) *Ibid.*
- 22) ジョン・ブルームによる経済学と倫理学との関連についての議論は、折原裕「経済学由来の倫理学とは？——ジョン・ブルームの所説に寄せて——」『敬愛大学・研究論集第58号』2000年6月、を参照。
- 23) *Ibid.*, p.28-29.
- 24) Stefano Gorini, “An economist’s plaidoyer for a secular ethics; the moral foundation and social role of critical rationalism”.
- 25) *Ibid.*, p.32.
- 26) *Ibid.*, p.42.
- 27) Hartmut Kliemt, “Conceptual confusions, ethics and economics”.
- 28) *Ibid.*, p.51.
- 29) *Ibid.*, p.55-56.
- 30) *Ibid.*, p.57.
- 31) アダム・スミス問題については、差し当たり、以下を参照。折原裕「よみがえるアダム・スミス問題——フィッツギボンズ説の検討——」『敬愛大学・研究論集』第56号、1999年9月。折原裕「アダム・スミス問題は死なず——ヤング説の検討——」『敬愛大学・研究論集』第57号、1999年12月。折原裕「アダム・スミス問題の限界」『敬愛大学・研究論集』第69号、2005年12月。
- 32) Lionel Robbins, *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 2nd ed., (London, Macmillan 1935) p.25. 辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』（東洋経済新報社、1957年）39頁。
- 33) *Ibid.*, p.28. 上掲、43頁。
- 34) *Ibid.*, p.148. 上掲222-223頁。